

特 集

子どもと水

水によって生み出される子どもの体験

桃枝智子

保育者として九年間保育実践に携わっていた私は現在、保育を学ぶ学生として、東京都内にある幼稚園で観察をさせていただいています。観察者という立場で子どもと保育者の生活の場に入る経験は、保育者だった当時の私と向き合い、保育実践を見つめるきっかけにもなっています。

今回は、これまでの観察記録をもとに、子どもが「水」とのかかわりの中でどのような体験をしているのか、三つの事例より考えてみたいと思います。

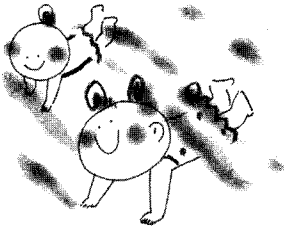
事例1「アイちゃんと一緒だね」  
(年少児・六月下旬)

年少児クラス合同のプール遊びが始まる。子どもたちはプールの中に入ると、早速「キャー」と水を掛け合ったり、出会った友達にタッチしたりする。

アカネ(仮名以下同様)は「おようよう」

とアイに呼びかけると、水底に両手をつきワニ歩きを始める。アイも「およごっか〜」と答えると、アカネの横に並んでワニ歩きを始める。アカネはワニ歩きをしながら「アイちゃんと一緒にだね!」とアイに呼びかける。(中略)

プール遊びが終了する。アイとアカネはプールから上がり、着替え終えると「気持ちよかったですね〜」「楽しかったね〜」と手をつなぎ、集合場所へと向かう。



アカネとアイが水と戯れる姿を観察しながら、私は「活き活き」という言葉は、まさにこのような様子を言い表すためにあるのだと思いました。なぜなら、彼女たちが水と混然一体となって躍動しているように見えたからです。

### 他者との間をつなく水

幼稚園に入園当初、見知らぬ他者であったアカネとアイは、六月半ばを過ぎたこの時期より、互いにつながりを求め、一緒にいる姿が多く観察されるようになりました。洋服の色や持ち物など、少しでも二人の間に同じことがあると、「キヤー」と叫び、抱きしめ合うセレモニーが頻繁に行なわれていたのもこのころでした。

そのような彼女たちにとって、プールの「水」は二人のつながり感を確かめることができる媒介物であったようです。ワニ歩きをすることによって生ま

れる波、その波のリズムを共に体感すること。このことは、地上では味わうことのできない水中ならではの身体感覚です。また、水の冷たさを体感することとでわき上がってくる情動を共にすること。このことは、二人のつながり感をより促進させる働きをもっていたと考えます。

事例中の「アイちゃんと一緒だね!」というアカネの言葉は、二人で同じワニ歩きをしているという行為に対してだけの言葉ではなく、水の性質がもたらしたつながり感を表す言葉だったのでしょう。

### 事例2 水飲み場での出来事

(年少児・七月当初)

セイタとタロウは、保育室前の水飲み場の前に立つと、水道の蛇口を次々にひねる。三つの蛇口から勢いよく水が流れ、シンク内に三つの

水の動きができる。二人はその様子をしばらく眺めると、今度はシンクの中に両手を入れ、ワイパーのように左右に動かす。しだいにシンクに水がたまり、排水溝の辺りがブクブクしてくる。セイタは手を離すと、排水溝に渦を巻いて吸い込まれていく水の様子をじっと見つめる。

今思うと、せっかちな元保育者の私は、彼らの行為を観察するというよりも、ハラハラとその行方を見守っていました。彼らのことを、何をするわけもなく、保育室をさまようことの多い子どものように見ていたことから、彼らの行為を「水を無駄遣いしている」「遊んでいない」ととらえていたのかもありません。

しかし、観察者として彼らをじっと観ているうちに、彼らは無意味な行為をしているとはいえないと思いはじめてきたのです。

## 生命を感じる水

矢野智司<sup>\*</sup>は、自己と世界との境界が溶解してしまうような「溶解体験」が生じる時、子どもは生命に触れる深い体験をしていると論じています。このような生命の体験として、再び彼らの行為をとらえ直してみると、次のようなことが推測できると思われます。それは、彼らが水と一体となり、生命の発生までさかのぼるような深い体験をしているのではないかと、水に溶け込み、再びわれに戻るような自己を感じる体験をしているのではないかとということです。

ひとたび内的な世界に私の視点を移してみると、これまで、静的な存在として私の目に映っていたセイトとタロウは、流れゆく水のように、新しい自分へと変容しようとする動的な存在となつて、私の前に立ち現れてきたのです。私は、大人の側からの目的や学びがあるかないかだけの視点で、子どもの行

為をとらえていたことに気づきました。表面的な網の目で子どもをとらえると、セイトとタロウは、意味のない行為をしている、遊べない子どもとして判断されてしまふでしょう。子どもの行為の意味は、大人の価値観の中ではなく、子ども自身の中にあるのだと感じさせられた出来事でした。

### 事例3 色水作り（年中児・九月当初）

サオリ、コトミ、リエ、アカネの四人は、それぞれ水が入った透明のボウルを手前に置き、ティンブルを囲んでいる。四人は、青色や緑色のカラーリボンを2cmくらいに裁断すると、ボウルの中にリボンを入れ、大きいスプーンでかくはんして色水を作る。この工程を黙々と繰り返している。リボンから色が溶け出してくると、ボウルに入った水はしだいに濃い色水へと変化

していく。

サオリはボウルの中から青のリボンを取り出すと、今度はリボンをザルの中に入れる。そしてボウルの上にザルを置き、大きなスプーンでリボンを押さえつけ、さらに濃い色水を作る。色水は赤色の色水と混ぜり紫色へと変化する。サオリは小さいペットボトルに紫の色水を入れると、目線をペットボトルまで下ろし、しばらく眺める。

彼女たちの色水作りに出合ったとき、私は色水作りの材料にリボンを使うのは、少しもつたいないような気がしました。しかし、これまでの姿を思い返してみると、彼女たちは、園庭に咲くオシロイバナなどの草花や絵の具を使った色水作りを、年少のころより何度も経験していたのです。リボンを使った色水作りは、これまでの歴史があつての発見だっ

たのでしよう。私は、保育に対する偏った思い込みがあつたことに気がつき、心より反省しました。

### 文化を生み出す水

彼女たちは、会話することもなく、黙々と、色水作りの工程を重ねていきます。リボンを水に浸す。かくはんする。ザルにリボンを入れ、押さえつけ、色水を濃くする。そして、できあがった色水をじっと見つめる。水に向き合い、色水を作り出していく彼女たちの間には、ゆったりとした贅沢な時間が流れています。その様子を見ていた私には、彼女たちが四歳の子どもではなく、熟練したこだわりの染職人のように思えてきました。

人はいつから色に惹かれ、色を生み出すようになったのでしょうか。人間が水との暮らしの中で生み出してきた文化の根源が、彼女たちの色水作りの姿から、垣間見えるように感じた出来事でした。

終 わり に

子どもは「水」とのかかわりの中でどのような体験をしているのか、三つの事例をもとに子どもたちの内実をとらえてきました。その結果、子どもたちは大人が考える以上に根源的な体験をしていることがわかりました。子どもが「水」によって他者とのつながりを感じていたこと、「水」と一体になるような体験をすることで自己を体験していたこと、「水」と向き合う中で人間が生み出した文化を根源的に体験していたこと、などです。

「水の性質の不思議さを感じてほしい」、「夏ならではの水遊びを経験してほしい」、「水が大切な資源であることを伝えたい」など、保育者は子どもたちにさまざまな願いをもち実践することがあるでしょう。しかしこのことは、子どもの自身の意味ある体験を見逃してしまふ、一瞬にして消滅させてしまふ

危険性をもはらんでいるということではないでしょうか。

子どもの深い体験。それは「子どもの行為の意味を大事にすること」「子どもに対する願いをもつこと」、この二つの間を行き来する中で、即興的に状況的に子どもにも応じていく保育者の姿勢によって導かれるのだということを改めて考えさせられました。「子ども」と「水」。この二つの間には、まだまだ深いメッセージが隠されているのではないかと思ひ始めています。今後、この関係について考察を進めるためには、私自身の深い体験と洞察が、重要な鍵となってくるのかもしれない。

(お茶の水女子大学大学院人間文化創成科学研究科  
博士後期課程)

※ 参 考 文 献

矢野智司「意味が躍動する生とは何か

遊ぶ子どもの人間学」世織書房 二〇〇六年